英語教師のための
基礎講座

これからの10年間に備えよ

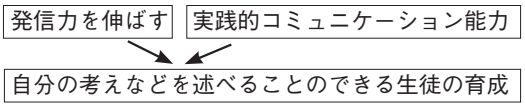
斎藤栄二　Saito Eiji
（京都外国語大学）

1「自分の考えを述べることのできる生徒」の育成

今はどういう時か，考えてみよう。新学習指導要領案が発表され，これからの約10年にわたって私たちの行う英語の授業の方向を示し続ける。そして規制し続ける。そういう時である。

この案の中で，中学校で目を引くのは，英語の授業時数が，週3から週4に変わることである。高校では，現行の科目名に代わって，「コミュニケーション英語Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ」や「英語表現」などの登場となるであろう。それらの改変を通じてどういう方向が出てくるのか。

英語の授業に，発信型の力を伸ばす方向が一層求められるのは間違いない。発信型の方向とか，実践的コミュニケーション能力の育成とか，ずっと聞かされてきているが，その具体的な中心の1つは，「自分の考えなどを述べることのできる生徒の育成」である。



2 最近の経験

（例1）高校の授業

拝見した授業では，生徒の声も高校生としては珍しくよく出ている。pair work も大きな声で行っていた。活発な授業である。それなりの優れた授業ということができる。授業が終わってから私は，

「教科書のエクササイズの中に，自分の感じ方を述べる発問が準備されていましたが，あの部分を省略されたようですがどうしてでしょうか」

と問いかけた。その先生は「まず基礎ができてから，そういう種類の課題に取り組ませようと思っています」というものであった。

（例2）ある研究発表1

ある高校の先生の研究発表を聞いた。研究発表を引き受けたくらいであるからかなり自信を持たれている様子の発表であった。そういえば，その先生のお名前は，研究会の要綱で何度か拝見したことがある。私にとっては，その先生の研究発表を聞くのは初めてである。私は「生徒が自分の考え方を述べるようになる手立て」をその先生がどのように立てておられるのか，そのこと1点に絞って聞いていた。しかしそこに行くとやや曖昧に「基礎をやってからそっちの方向に行こうと考えています」と述べて終わられた。

（例3）ある研究発表2

優れた研究発表であった。学生のレベルはかなり低い。それにどう対応するのか。そのための実践を紹介された。授業構成もしっかりしている。研究発表のあとフロアから質問が出た。

「自己表現力などはどのように伸ばされますか」

発表者は「a や the の使い分けもできていない学生ですから，自己表現力といっても，無理だと思います。やはりもう少し基礎を積みあげてからのことになると思います」と述べられた。会場の先生方の間には「それはそうだろう」という感じがあってなんとなく納得したようであった。しかしその日に呼ばれていた講演者は，心理学専攻の方であるが，その後の講演の中で，この考え方にやんわりと疑問を呈された。私はさすがに鋭いと思った。ただ研究発表したご本人にその意味が伝わったかどうか。

3 問題点は何か

（例1）についても（例2）についても，私が口先まで出かかっていた言葉は，

「それでは先生，先生のいう基礎というのは，いつできあがるのですか？」
という言葉である。今まで多くの実践を拝見してきたが，「基礎学力ができました。それではこれから自分の考えなどを述べる生徒を育てるための授業に入ります」などと段階を踏まえた意識を持たれた先生には1人として出会ったこともない。多くの先生が述べられる「基礎学力をつけることができた時」というのは永遠にやってこないのである。そうである限り，先生方は今いちばん要求されている「自分の考えなどを述べる生徒を育てる」授業の方向に目を向けず，また多くの力がその方向に注がれないことになる。厳しい言い方をさせてもらうと，「基礎学力ができてから」というのは一種の逃げではないか。

a と the の使い分けについては，上越教育大の平野絹枝先生の研究とその発表を思い出す。中学2年生の段階における冠詞の使い方の誤りは約20%と出たそうだ。そこで大学生の場合にも調査したところ，やはり冠詞の誤りは20%前後だったそうだ。だとすれば「冠詞の使い分けができるのを待つ」というのは，いくら待ってもそういう時期はやってこないということになる。この私の指摘はやや突飛かもしれない。しかし［基礎学力をつける］→（そのあとで）→［自己表現力をつける］という種類の考え方をここで砕いておかなければならない。それがこの稿の目的である。そうでなければこれから10年の新しい学習指導要領の方向に沿った授業の展開は功を奏さないであろう。

4　これからの方向

子供の言語習得を考えてみよう。子供は a や the の使い分けができてから自分の考えを述べ出すなどということはない。a や the の使い分けも自己表現の力も同時進行的に起こるのである。図示すれば(1)ではなく(2)である。

(1) 基礎ができる
→（次の段階として）→ 自己表現力を育てる

(2) 基礎学力をつける ↘
自己表現力の育成 ↗ ［同時進行］

(1)は段階的であり(2)は共起的である。(1)から(2)へ持っていくためには，かなりの指導力が要求される。

基礎学力をつける方法の1つとして文型練習がある。簡単な例を挙げると What is this? It is (an apple). のようなやりとりで（　　）の中の果物をいろいろと替えて練習していく。この文型練習と，自分の考えを述べる練習とを比較してみよう。次の表をご覧いただきたい。

	文型練習	自分の考えを述べる練習
言いたいこと		×
文型例	○	×
意味	○	×
相手の反応	○	×

○は最初から与えられていること，×は与えられていないことを示す。したがって×のところは自分で考えなければならない。文型練習では What is this? It is (an apple). と文型例は与えられているから○，文型例が与えられていれば当然意味もついてくるから○，そして相手の反応も分かっているから○である。しかし自分の考えを述べる場合は，まず「何を言いたいか」を考えなければならない。その次はその言いたいことを表す英語の文を，自分の手持ちの中から探さねばならない。それを相手に発話したとして，相手がどう反応してくるかも予想できない。したがってすべてにわたって×なのである。(1)と(2)の間にはこれだけの開きがある。

しかしこの(1)と(2)の間に存在する川を渡ってほしい。そういう実践を展開してほしい。シーザーが元老院の命令を無視してルビコン川※を渡ったように，従来の考え方を離れて新しい向こう岸に足を踏み入れてほしい。私もささやかながら皆さんと力を合わせたい。その行き先にこれから10年間の英語の授業の展望を私は見たいと願っているのである。

※ルビコン川は古代ローマにおいて，イタリアとその北の属州ガリアとの境界。軍団を連れてここを渡ることは反逆とみなされ，禁止されていた。シーザー（カエサル）はルビコン川を渡る時に「賽（さい）（サイコロ）は投げられた」と言った。後戻りをしない重大な決断を意味した。